

和田平遺跡発掘調査報告書

2001

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

和田平遺跡発掘調査報告書



東広島市位置図 (◎は和田平遺跡を示す)

2001

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

例　　言

- 1 本書は、2000（平成12）年度に調査を実施した東広島呉自動車道建設事業に係る和田平遺跡（東広島市西条町福本所在）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）広島国道工事事務所との委託契約により財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 3 発掘調査は、辻　満久・出野上　靖が担当した。
- 4 出土遺物の整理・復元・実測、図面の整理、写真撮影は、辻・出野上が分担して行なった。
- 5 本書の執筆は、I・II・III・IV-1を出野上、IV-2・Vを辻が行ない、編集は出野上・辻が行なった。
- 6 土器の断面は須恵器を黒塗り、ほかは白ヌキとした。
- 7 遺物は挿図・図版とも同じ番号を使用した。
- 8 本書に使用した方位は第2・3図が真北で、ほかは磁北である。
- 9 第1図は建設省国土地理院発行の1：25,000地形図（清水原・田万里市）を使用した。
- 10 第3図の座標値は、日本測地系第Ⅲ系（旧座標）による。

目 次

I はじめに.....	(1)
II 位置と環境.....	(3)
III 調査の概要.....	(7)
IV 遺構と遺物.....	(9)
V まとめ.....	(27)

挿図目次

第1図 東広島呉自動車道路線図.....	(1)
第2図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)	(4)
第3図 周辺地形図 (1:2,000)	(8)
第4図 地形測量図 (1:300)	(9)
第5図 SK 1実測図 (1:15)	(10)
第6図 SK 2実測図 (1:40)	(11)
第7図 出土遺物分布図 (1:200)	(12)
第8図 出土遺物実測図 (1) (1:2)	(15)
第9図 出土遺物実測図 (2) (1:2, 1:3)	(16)
第10図 出土遺物実測図 (3) (1:2)	(17)
第11図 出土遺物実測図 (4) (1:2)	(18)
第12図 出土遺物実測図 (5) (1:2)	(19)
第13図 出土遺物実測図 (6) (1:2)	(20)
第14図 出土遺物実測図 (7) (2:3)	(21)
第15図 出土遺物実測図 (8) (2:3)	(22)
第16図 出土遺物実測図 (9) (2:3)	(23)

図版目次

- | | | | |
|------|----------------------|-------|-----------------------|
| 図版 1 | a 遠景（調査前、東から） | 図版 5 | a C - 3 区遺物出土状況（北西から） |
| | b 近景（調査前、東から） | | b E - 1 区遺物出土状況（南から） |
| | c 全景（調査後、東から） | | c 鉄鏃出土状況（南から） |
| 図版 2 | a SK 1 検出状況（北から） | 図版 6 | 出土遺物 1 土器 |
| | b ↗ 土層断面（北西から） | 図版 7 | 出土遺物 2 土器 |
| | c ↗ 完掘（北から） | 図版 8 | 出土遺物 3 土器 |
| 図版 3 | a SK 2 検出状況（南から） | 図版 9 | 出土遺物 4 土器 |
| | b ↗ 土層断面（東から） | 図版 10 | 出土遺物 5 土器 |
| | c 調査風景（東から） | 図版 11 | 出土遺物 6 土器・石器・鉄器 |
| 図版 4 | a C - 2 区遺物出土状況（西から） | 図版 12 | 出土遺物 7 石器 |
| | b ↗ (北から) | | |
| | c C - 3 区遺物出土状況（北から） | | |

表目次

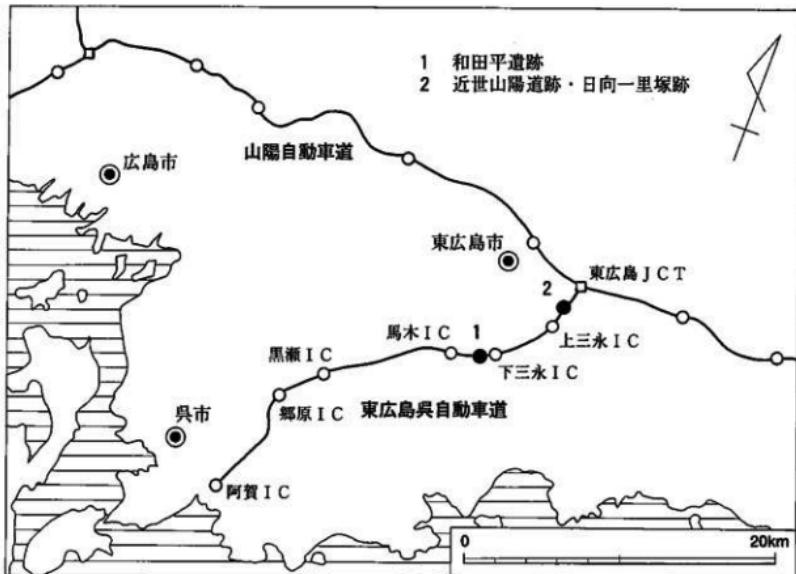
- | | | |
|-----------|-------|------|
| 表 1 土器観察表 | | (24) |
| 表 2 石器計測表 | | (26) |

I はじめに

本報告書は東広島呉自動車道建設事業にかかる和田平遺跡の発掘調査報告である。

東広島呉自動車道は、「ゆとりある地域社会」の実現をめざし、全国の都市・農村地区から約1時間以内に高速ネットワークに到着できるよう整備される高規格幹線道路のひとつで、山陽自動車道の東広島市高屋町溝口を起点とし、終点の呉市阿賀中央五丁目にある延長32.8kmの自動車専用道路である。1984（昭和59）年、本道路沿線にあたる東広島市・呉市・竹原市・賀茂郡黒瀬町は、豊田郡安芸津町とともに広島中央テクノポリス地域に指定され、地域産業の技術高度化と先端技術開発の拠点を目指して関連企業の進出や住宅開発が進んでいる。また、近年の都市化に伴い、一般国道375号など沿線の主要道路の交通渋滞が頻繁に発生するようになり、新たな幹線道路の整備が必要とされるようになった。本道路の完成によって、沿線の各市町間や芸南地域各町から山陽自動車道・広島空港・新幹線東広島駅などへのアクセス向上が期待されている。

1989（平成元）年8月、建設省は東広島呉自動車道の基本計画を決定し、1991年12月、東広島JCT（仮称）・馬木IC（仮称）間の整備計画・施行命令を出した。1995年2月、建設省中国地方建設局広島国道工事事務所（以下「建設省」という。）は東広島市教育委員会（以下「市教委」という。）に東広島呉自動車道建設事業地内における文化財等の有無及び取扱いについて協



第1図 東広島呉自動車道路線図（JCT・IC名は仮称）

議した。これを受けて現地踏査を実施した広島県教育委員会（以下「県教委」という。）は、同年7月、上三永・馬木間に3遺跡及び要試掘箇所25か所が存在する旨を回答した。その後、県教委は要試掘箇所の試掘を順次行ない、1999年12月、和田平遺跡を確認した旨を建設省に通知した。建設省と県教委・市教委は和田平遺跡・近世山陽道跡・日向一里塚跡の取扱いについて協議を重ねたが、計画変更等による現状保存は困難との結論に達し、事前に発掘調査による記録保存を図ることになった。2000年3月、建設省から県教委へ和田平遺跡の調査依頼があり、県教委は財團法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）が発掘調査を行なうことが適当であると通知した。

2000年4月1日付けで、センターは建設省との委託契約を締結し、同年4月10日から6月9日までの2か月間、和田平遺跡の発掘調査を実施した。本報告書は、以上の経過のもとに実施した和田平遺跡の調査成果をまとめたもので、今後の埋蔵文化財の資料として、また、この地域の歴史の一端を知る手がかりとして、少しでも寄与できれば幸いである。

なお、発掘調査にあたっては、建設省中国地方建設局広島国道工事事務所、東広島市教育委員会及び地元の方々に多大な御協力を得た。記して感謝の意を表します。



和田平遺跡調査風景

II 位置と環境

和田平遺跡が所在する東広島市は広島県のほぼ中央に位置し、賀茂台地の南側にあたる西条盆地を中心に高屋・志和の両盆地とその周囲の山々からなる。西条盆地の南縁には、洞山・蚊無奥山など標高400~500m級の山々が東西に連なり、その北面を流下する河川は山麓に多数の扇状地を形成している。これらの小河川は三水川や松板川として盆地南部を西に流れ、賀茂台地西部に源を発する黒瀬川と合流する。本遺跡は黒瀬川支流の松板川の南側に位置し、北に開いた扇状地の緩斜面に立地する（標高230m・比高10m）。広島大学の統合移転を契機に1974（昭和49）年に市制を施行した東広島市では人口増加が著しく、都市基盤の整備などに伴う発掘調査によって地域の歴史がしだいに明らかになっている。

以下において、本遺跡が存在する西条盆地南部を中心に、歴史的環境について概観したい。

【旧石器時代・縄文時代】

本遺跡の北西約4kmにある広島大学周辺の鏡山丘陵では、比較的多くの旧石器・縄文時代の遺跡が確認されている。

旧石器時代の遺跡としては、西ガガラ遺跡⁽¹⁾・鴻ノ巣遺跡⁽²⁾・ぶどう池南遺跡⁽³⁾があり、西ガガラ遺跡で平地式住居跡・炉跡・土壙、鴻ノ巣遺跡・ぶどう池南遺跡では土壙を検出している。

縄文時代の遺跡としては、上記の遺跡のほかに鴻ノ巣南遺跡・中山池南遺跡がある。ぶどう池南遺跡・鴻ノ巣遺跡では早期の炉跡・土壙、鴻ノ巣南遺跡では土壙、中山池南遺跡では中期の平地式住居跡・炉跡・土壙を各々検出している。

【弥生時代】

弥生時代前期から中期前半の遺跡の調査例は少ない。貢付谷遺跡では前期の貯蔵穴・土壙墓を検出し、西東子遺跡では前・中期の建物跡・溝のほか水田状遺構を検出している。

中期後半・後期の調査例は多く、鏡西谷遺跡・奥田大池遺跡・助平2号遺跡など、丘陵や尾根の斜面に立地する集落跡がみつかっている。狐が城遺跡では、丘陵上で箱式石棺墓・土壙墓などを検出している。また、西東子遺跡では東九州（安国寺式）の土器が出土し、瀬戸内海を挟んだ交流が想定されている。

【古墳時代】

西条盆地では県内最大規模（全長92m）の前方後円墳である史跡三ッ城古墳⁽⁴⁾（5世紀後半から6世紀初めに築造）をはじめ、多くの古墳が確認されている。盆地南部の古墳としては、帆立貝形の墳丘の長者スクモ塚第1号古墳、箱式石棺を主体部とする長者スクモ塚第2・3号古墳などがある。箱式石棺に似た竪穴式石室をもつものには鏡千人塚古墳・狐が城古墳があり、竪穴系横口式石室をもつものには助平古墳がある。後期の横穴式石室を埋葬施設とする古墳としては、陣ヶ平西古墳⁽⁵⁾・鏡東谷古墳⁽⁶⁾・奥田大池古墳⁽⁷⁾・大槻第2号古墳などがある。

集落跡としては中・後期の助平3号遺跡、後期の平木池遺跡がある。また、陣ヶ平西遺跡では



第2図 周辺遺跡分布図 (1 : 25,000)

- | | | | |
|--------------|--------------|--------------|--------------|
| 1 和田平遺跡 | 2 森近土居屋敷跡 | 3 城平山城跡 | 4 第1若山城跡 |
| 5 第2若山城跡 | 6 夫婦茶屋古墳 | 7 午王曾原遺跡 | 8 新開窯跡 |
| 9 興市水源池南側窯跡 | 10 向原古墓群 | 11 西東子遺跡 | 12 清水奥山遺跡 |
| 13 興市水源池北側窯跡 | 14 興市水源池北側窯跡 | 15 長者スクモ塚古墳群 | 16 長者龍王山南麓遺跡 |
| 17 五反田遺跡 | 18 五楽1号遺跡 | 19 五楽2号遺跡 | |

須恵器の窯跡（第1・3号窯跡）を検出している。

【古代】

古代山陽道は、西条盆地の北部を東西に通っていたとされ、史跡安芸国分寺跡では、講堂跡の基壇や塔跡の礎石などを検出している。盆地南部では、東ガガラ窯跡をはじめとする奈良・平安時代の須恵器窯跡がいくつか確認されている。また、吉光谷遺跡では、平安時代の土塙墓を検出している。

【中世】

とくに中世後期の室町時代から戦国時代にかけては、当盆地は周防の大内氏と出雲の尼子氏、さらには安芸の毛利氏など諸勢力の抗争の舞台となる。史跡鏡山城跡は大内氏が安芸国での拠点とした山城である。盆地内には尼子氏が拠ったとされる陣ヶ平城跡などの城跡や道照遺跡・荒谷土居屋敷跡・五反田遺跡などの居館跡があり、本遺跡付近にも城平山城跡・森近土居屋敷跡などがある。また、石神製鉄遺跡では製鉄炉・蘿の台座などを検出し、中世における鉄生産の貴重な資料を提供している。

【参考文献】

西条町誌編纂室「西条町誌」 西条町 1971年

【註】

- (1) 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会「西ガガラ遺跡」「広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報」Ⅲ・Ⅳ・Ⅹ・Ⅺ・Ⅻ 1984・1988・1995・1997年
- (2) 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会「鴻ノ巣遺跡」「広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報」Ⅴ・Ⅵ 1989・1990年
- (3) 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会「ぶどう池南遺跡」「広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報」Ⅷ・Ⅸ 1991・1997年
- (4) 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会「鴻ノ巣南遺跡」「広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報」Ⅺ 1995年
- (5) 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会「山中池南遺跡」「広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報」X・Ⅺ・Ⅻ 1992・1998・1999年
- (6) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「貞符谷遺跡」「金平山遺跡・貞符谷遺跡」 1992年
- (7) 財団法人東広島市教育文化振興事業団「西東子遺跡発掘調査報告書」 1996年
- (8) 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会「鏡西谷遺跡」「広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報」Ⅰ・Ⅱ 1982・1983年
- (9) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「奥田大池遺跡」「奥田大池遺跡」 1983年
- (10) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「助平2号遺跡」「西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(I) 1983年
東広島市教育委員会「助平2号遺跡」「西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書」II 1993年
- (11) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「狐が城遺跡」「西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(I) 1983年
- (12) 広島県教育委員会「三ツ城古墳」「広島県文化財調査報告」第1輯 人文編 1954年
東広島市教育委員会「史跡三ツ城古墳・保存整備事業第1～5年次発掘調査概報」 1989～1991年
- (13) 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会「鏡千人塚古墳」「広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報」I 1982年
- (14) 註(10)に同じ
- (15) 東広島市教育委員会「助平古墳」「西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書」I 1992年
- (16) 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会「陣ヶ平西古墳」「広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報」Ⅸ 1991年
- (17) 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会「鏡東谷古墳」「広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報」

Ⅲ・Ⅲ 1983・1984年

- (18) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「奥田大池古墳」「奥田大池遺跡」 1983年
- (19) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「大槻第2号古墳」「大槻遺跡群」 1985年
- (20) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「助平3号遺跡」「西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(Ⅱ) 1993年
- (21) 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「平木池遺跡発掘調査報告」1982年
- (22) 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会「陣ヶ平西遺跡」「広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報」XI 1993年
- (23) 広島県教育委員会「安芸国分寺跡第1次調査報告」 1970年
広島県教育委員会「安芸国分寺跡第2次調査報告」 1971年
広島県教育委員会「安芸国分寺跡第3次調査報告」 1972年
東広島市教育委員会「安芸国分寺遺跡発掘調査報告書」「埋蔵文化財調査報告書」 1987年
財団法人東広島市教育文化振興事業団「史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書」 1999年
- (24) 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター・広島大学「東ガガラ窓跡」「広島大学統合移転地内埋蔵文化財発掘調査報告」 1982年
- (25) 財団法人東広島市教育文化振興事業団「阿岐のまほろば」Vol.17 2000年
- (26) 東広島市教育委員会「鏡山城跡」「埋蔵文化財調査報告書」 1987年
- (27) 東広島市教育委員会「道照館跡発掘調査概報」 1981年
広島県教育委員会「道照遺跡」 1982年
- 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「道照遺跡」「大槻遺跡群」 1985年
東広島市教育委員会「道照道路」「西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書」Ⅱ 1993年
- (28) 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「荒谷土居屋敷跡発掘調査概報」 1980年
- (29) 財団法人東広島市教育文化振興事業団「五反田遺跡発掘調査報告書」 1994年
- (30) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「石神製鉄遺跡」 1985年

III 調査の概要

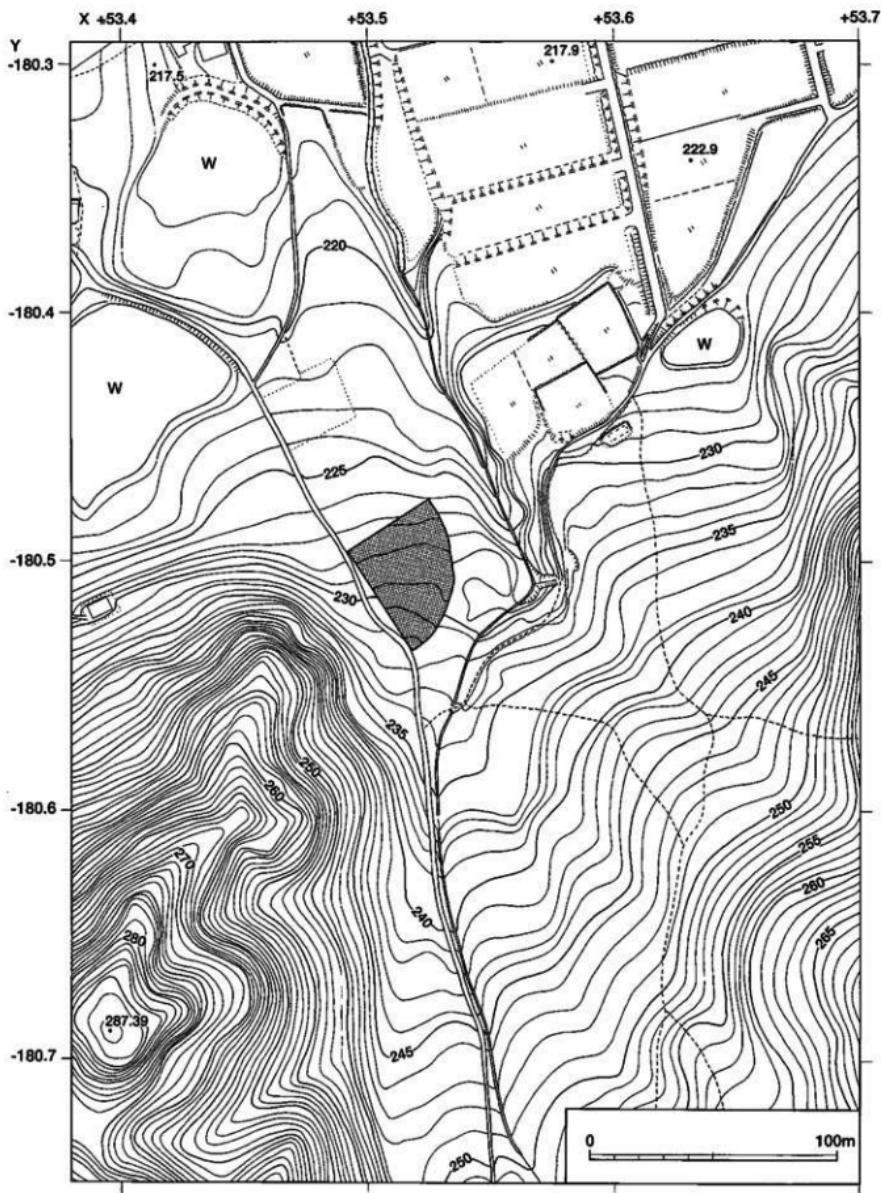
和田平遺跡は、西条盆地南縁に連なる山々から北に延びた尾根の先端にそびえる龍王山（標高432m）・（通称）竜の口（同315m）に挟まれた小河川がつくった扇状地に立地する縄文時代の集落遺跡（標高230m、比高10m）である。遺跡周辺の現況は雑木林の緩斜面で、山腹から流出したとみられる数10cm～2m程度の大きさの石が多数露出していた。

発掘調査は、試掘坑による基本層序の確認から開始した。調査区内に一辺約1mの平面方形の試掘坑10か所を設定し、調査区内の土層の堆積状況、遺物分布の疎密などを調査した。この結果、表土である暗褐色土（腐食土）の下位に遺物を包含する黄褐色粘質土層があり、それ以下は無遺物層（調査区西側では橙褐色土、東側では淡灰色土）であること、遺物包含層までの深さは地表から数10cm程度で、調査区中央部を中心に分布することが判明した。

これら試掘坑による調査成果をもとに、表土及び黄褐色粘質土層の上層までを重機によって除去し、それ以下は人力によって掘りさげて遺構検出作業を行なった。調査区に露出した石には黄褐色粘質土層以下に達するものも多数あり、黄褐色粘質土層・無遺物層にも同様に石が含まれていた。これらのことから、遺跡の時期にはすでに地表に石が露出した状況であり、その後も断続的に土石の流入があったものと考えられる。

表土の除去後、調査区全体に10m四方のグリッドを設定した。区名は、最も標高の高い調査区南隅に基準杭を設定し、この杭を南隅とする区画をA-1区とし、北西方向にA～Eとアルファベット、北東方向に1～4と数字を配してこれらの組み合わせにより、区名（A-1～E-4区）を付した。遺物の取り上げは区ごとに行なったが、遺物集中部については遺物1点ごとにその出土位置と標高を記録して取り上げた。

検出した遺構は炉跡と考えられる土坑2基で、ともに出土遺物がなく所属時期は特定できなかった。遺物は縄文時代の土器・石器が大半を占め、3か所の遺物集中部を中心に出土した。出土点数は500点以上を数え、県中南部では数少ない縄文時代遺跡の調査例として貴重な資料を提供することとなった。このほか、縄文時代以外の遺物として、古墳時代の須恵器（杯蓋）1点、中・近世の鉄鎌1点が出土した。

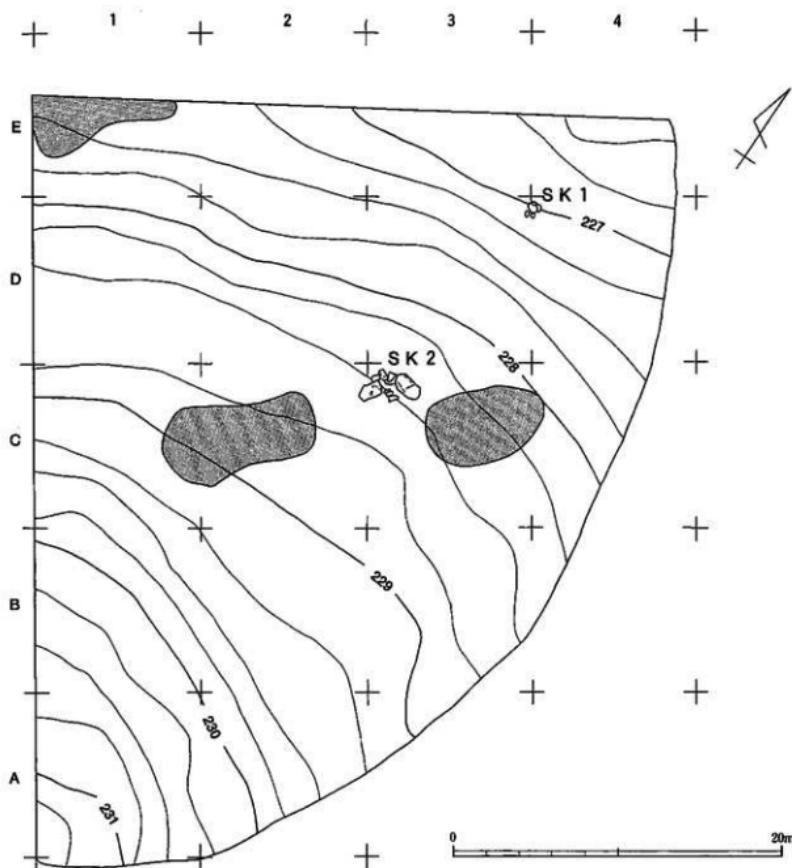


第3図 周辺地形図（1：2,000）（アミ目は和田平遺跡を示す）

IV 遺構と遺物

1 遺構

遺構は、時期不明の炉跡と考えられる土坑2基（SK1・2）のほか、縄文時代後期の遺物集中部3か所（C-2・3区、E-1区）を検出した。



第4図 地形測量図（1：300）（アミ目は遺物集中部を示す）

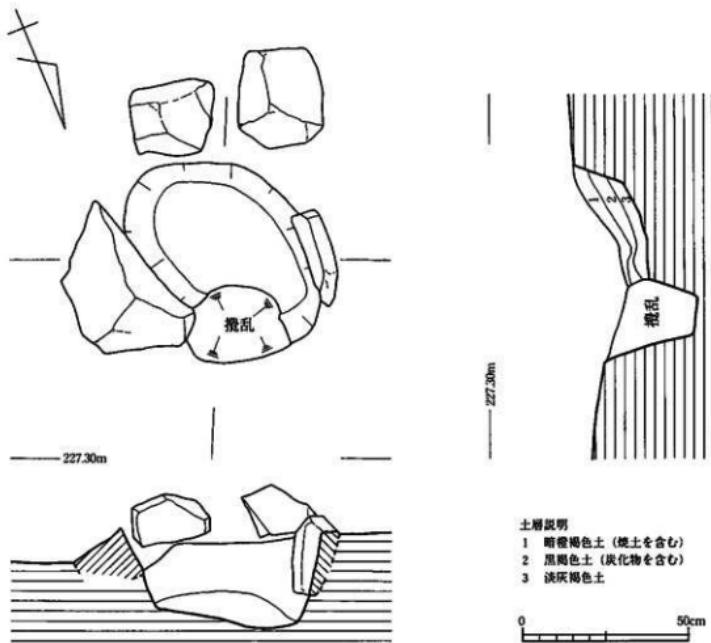
SK 1 (第5図、図版2-a・b・c)

調査区北部のD-3・4区境の黄褐色粘質土下層で検出した土坑である。北に向かって下がる調査区のなかでも最も低位な部分にあたる。

周囲を30~50cm程度の大きさの角礫4個で囲まれ、その中に平面形が椭円形の浅い穴が掘り込まれていた。

土坑の規模は、東西45cm、南北70cm、深さ19cmで、底面は北側に下傾する。覆土は、暗橙褐色土(焼土を含む)、黒褐色土(炭化物を含む)、淡灰褐色土の3層で、土壤に接する石には熱によって変色した部分が観察された。

遺構の性格は、覆土に焼土や炭化物を含むことや熱変した石の存在などから炉跡と考えられる。出土遺物はなく、土坑の時期は不明である。



第5図 SK 1 実測図 (1:15)

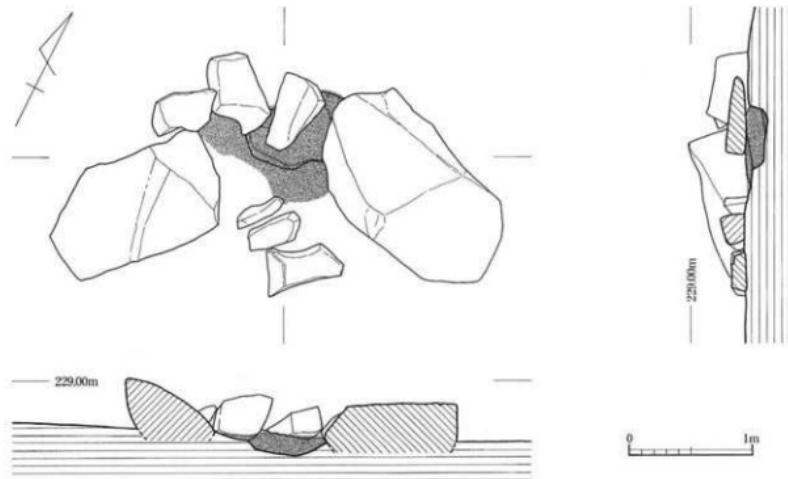
SK 2 (第6図, 図版3-a・b)

調査区中央やや北寄りのC-3区の黄褐色粘質土下層で検出した土坑である。東西両側に大型の角礫（一辺が1~2m）2個に囲まれ、北側に小型の角礫（一辺約50cm）3個を配し、その内側に平面形が不整な楕円形の浅い土坑が掘り込まれている。土坑の規模は、東西65cm、南北45cm、深さ10cmで、覆土は約5mmの炭化物を含む暗褐色土である。土坑の上面には、1.1×0.9mの範囲に熱変した暗赤褐色土が堆積していた。

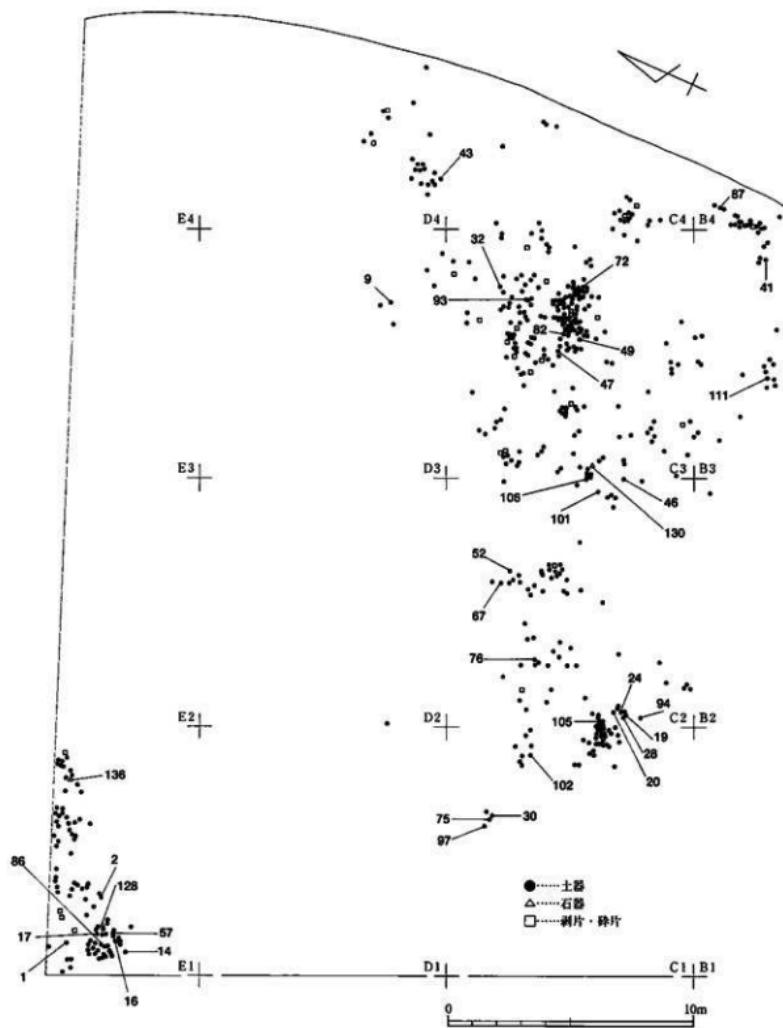
遺構の性格は、炭化物を含む覆土や焼土状の堆積土の存在などから、炉跡と考えられる。出土遺物はなく、土坑の時期は不明である。

遺物集中部 (第7図, 図版4-a・b・c, 5-a・b)

遺物集中部は、黄褐色粘質土下層の3か所 (C-2・3区, E-1区) で検出した。遺物は大半が繩文時代後期の土器と石器である。土器の型式は、E-1区が後期初頭（中津式）、C-2・3区は後期前半（彦崎K II式並行期）のものが大部分を占め、両型式の混在はほとんどみられない。また、遺物の広がりについては、前者は調査区外の北西側に広がる可能性が高く、後者は部分的に散漫な部分があるものの、C-2・3区から出土した土器の型式が共通することから両区にまたがる帶状の広がりを考えることができよう。



第6図 SK 2 実測図 (1:40) (アミ目は焼土状堆積土の範囲)



第7図 出土遺物分布図 (1 : 200)

2 遺物

(1) 出土遺物の概要

遺跡のほぼ全域に堆積している黄褐色粘質土層から縄文土器や石器が出土している。量的には縄文土器が主体を占めるが、いずれも小片が多く、全形が窺えるものはほとんど無い。土器の時期については縄文時代前期から後期と思われる。石器には石鎌・抉入石器とスクレイパーなどがある。このほか、表土直下の隙間から鉄鎌が出土している。

(2) 縄文土器

ここでは有文土器を中心に分類、図化したが、このほかに無文土器がある。有文土器は文様構成や施文手法の特徴から9類型に分類した。基本的には大まかな時間軸に沿って分類したが、各類型がそのまま從来の形式に対応するわけではない。後期の土器に限って言えば、凹線もしくは沈線で文様を構成するもの、いわゆる磨消縄文をもつもの、縄文地のものなどに分かれる。全体の傾向としては、深鉢形・浅鉢形など器種の分化とともに、磨消縄文の消失→無文化へと推移するようである。

1類（第8図1・5、図版6）

胴部に2列単位の間隔の狭い連続刺突文を施すもの（1）や、二枚貝による貝殻条痕をもつもの（5）である。刺突は狭い間隔で行われているが、押し引きにはならず、一旦器壁から施工工具を離して、次の施文をしているようである。

2類（第8図2～4・10、図版6）

胴部に連続刺突文をもつものである。屈曲部に横方向に連続刺突文を施すものや、これに間隔を置いて粘土紐もしくは刺突文による継位方向の区画帯を作り出し、長方形区画を構成するもの（4）がある。また、貼付突帯に刺突文を施し、刻目を巡らせるもの（10）もある。

3類（第8図6・7、図版6）

外面に細い竹管状の工具により押引文を施すもので、器厚は4mm程度と非常に薄い。内面は押引文を施した部位が内側に蒲鉾状に盛り上がっており、器壁が凹凸を繰り返す。また、盛り上がった部分には指頭圧痕がみられる。

4類（第8図8～9、図版6）

L Rの縄文地に半截竹管による連続押引文を施すもので、口縁直下に蒲鉾状の突帯を貼り付け、その上に刻目を施す。さらにこの突帯の下方に押し引き文が2条巡る。8・9はいずれも胎土に雲母片を含むことから、同一個体と思われる。

5類（第8図11・12、図版6）

条痕地に幅広の「D」字形の爪形文による連続刺突文を施すものである。横方向に間隔の狭い刺突文を施し、その上部にやや間延びした刺突文が半円状に巡る。深鉢形土器と考えられる。

6類（第8図13～17・第9図18・第83・84図、図版6・7・10）

縄文をもたず、四線文もしくは沈線文で文様を構成するものである。幅広の四線文で構成される土器（13～15）は端部を施文後に軽くなされたり、丸みをもつ。沈線文で構成される土器（16～18・83・84）は条痕地に沈線を施すもので、いずれも幾何学的な曲線をモチーフにしている。また、円文のもの（15）もある。器種構成の点では深鉢形土器（13～18）と浅鉢形土器（83・84）があり、後者はいずれも波状口縁である。

7類（第9図21～28・第12図85～95、図版7・10）

磨消縄文をもつグループで、緩やかな曲線文を基調とするもの（21～24・28・91・92）と直線的な文様で構成されるもの（85・87～90・93）および幾何学的な模様をもつもの（86・94・95）に分かれる。85のように長方形の区画に幅狭の縄文帯をもち縦方向の沈線で文様帯を分離するものや基本的には85と同様のモチーフで縦方向に粘土を貼付けて隆起帯を作り、この中央に沈線を縦位に垂下するもの（95）さらに方形の磨消文様帯から角の取れた幅狭稍円の磨消文様帯になったもの（94）などがある。縄文はLRのもの（23・24・28・86・94）とRLのもの（21・25・26・85・87・91～93・95）に分かれる。

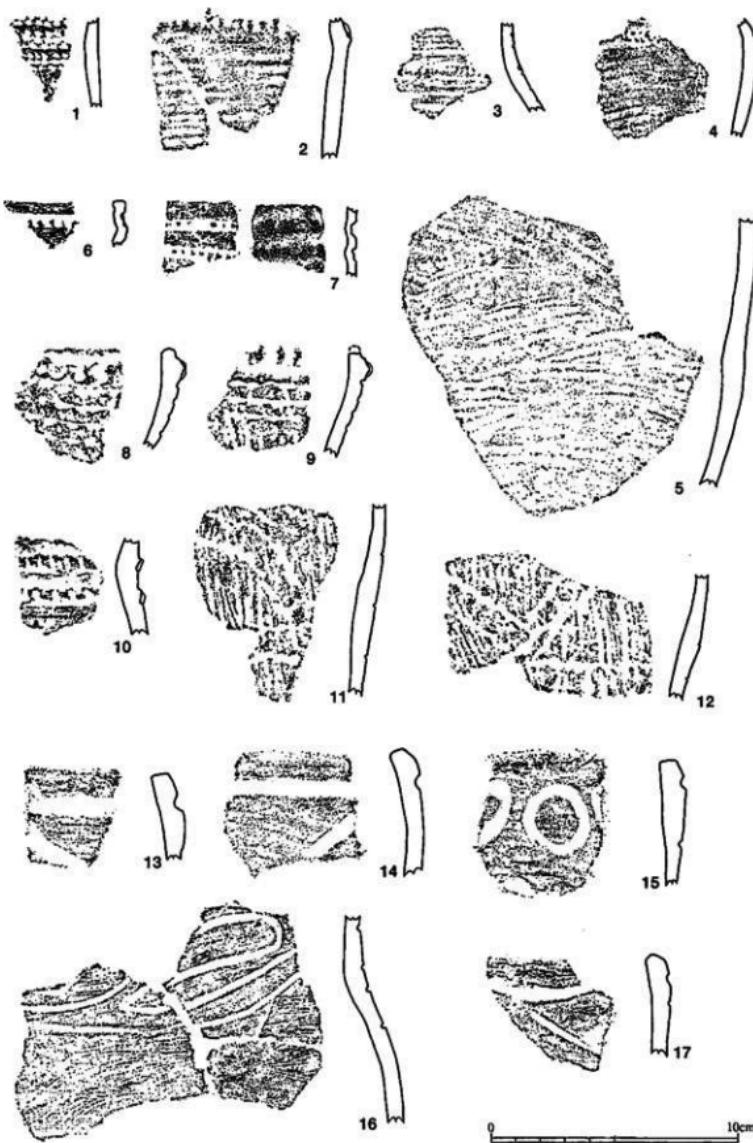
8類（第9図19・20、図版7）

口縁部に肥厚帯をもち、肥厚帯に短沈線や縄文などを施文するもので、確認できたのはごく少數である。口縁部を内側に肥厚させて、受け部のようにしている。この肥厚部の状況から波状口縁を呈すると考えられるが、胴部については不明である。

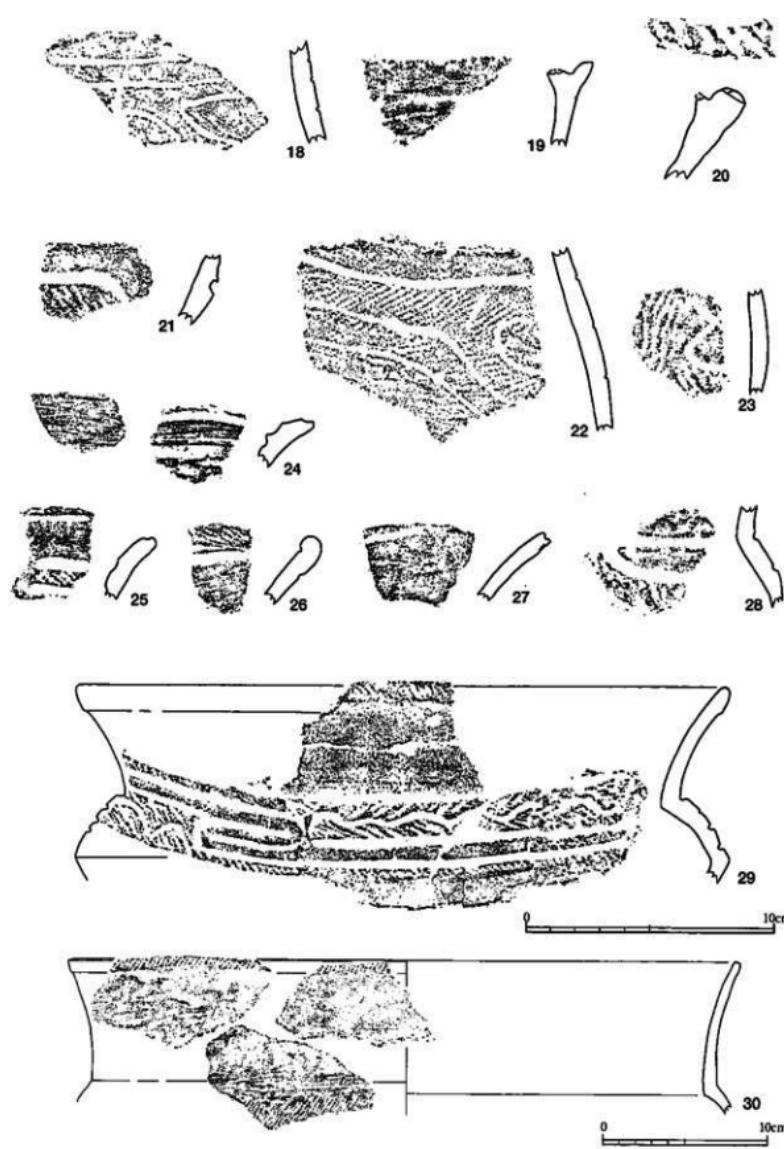
9類（第9図29・30・第10図・第11図56・58・60～76・81・82・第12図96～105、図版7～10）

深鉢形土器と浅鉢形土器で構成される。まず、深鉢形土器では口縁部直下に縄文を施す。基本的に頸部は無文で、肩部から胴部中央にかけては磨消縄文をもつもの（58・61）や縄文を施さず単に細い沈線だけで表現したもの（65～69）や文様帯の縄文地に同方向の短沈線を加えたもの（29・58）、さらには縄文地に斜方向の沈線を加えたもの（60・64）などがある。また、このほかに縄文だけを施文したものもある。

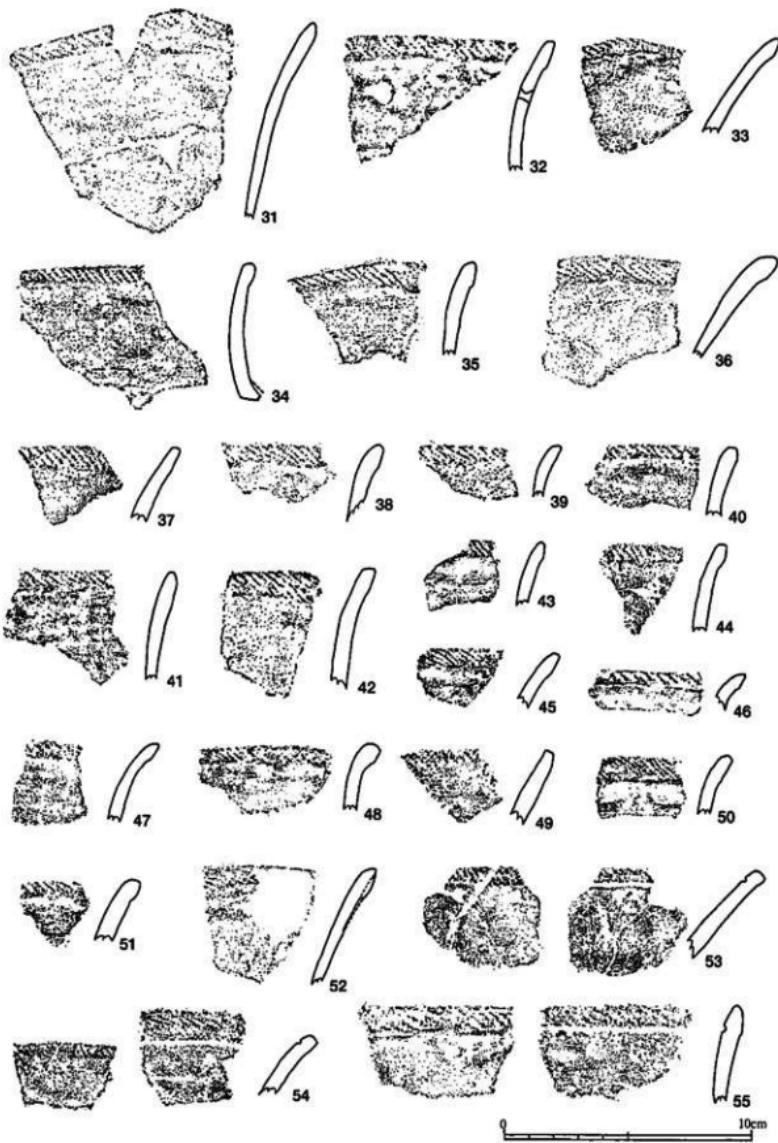
口縁部直下の外側に肥厚する部分にRLの縄文を施文する。肥厚が認められないものもしくは弱いもの（37・45）、削出し状の調整によって施文部を作り出すもの（46・51）、口縁の内外面に縄文を施し、この縄文帯の下辺に沈線を施すもの（53～56）などがある。平口縁と波状口縁が存在するが、波状口縁でも波頂部に文様集約部を形成するものはみられない。



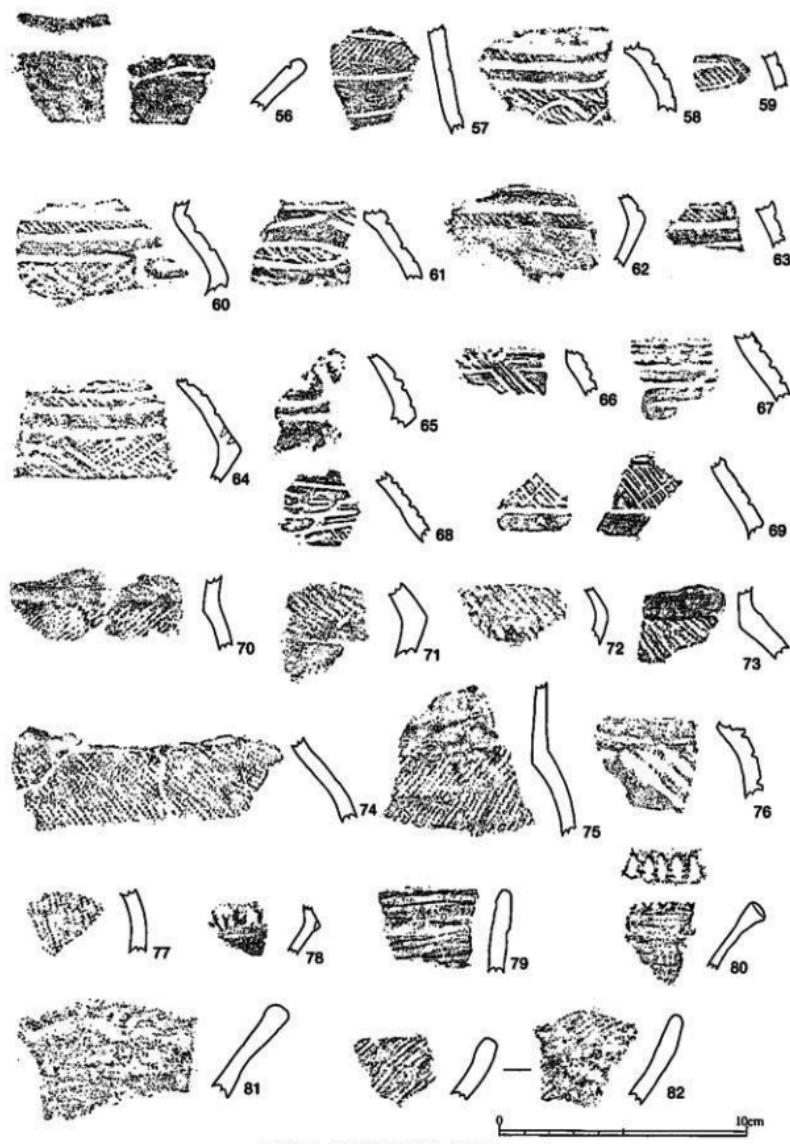
第8図 出土遺物実測図(1)(1:2)



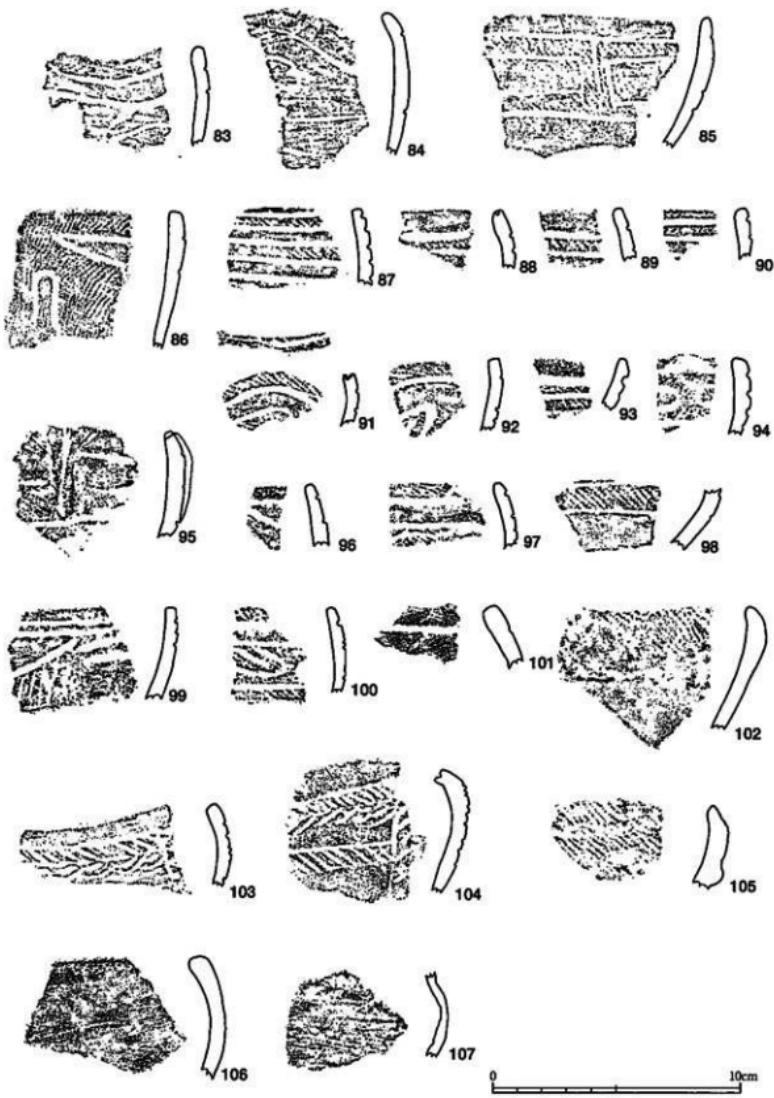
第9図 出土遺物実測図(2) (1:2, 1:3)



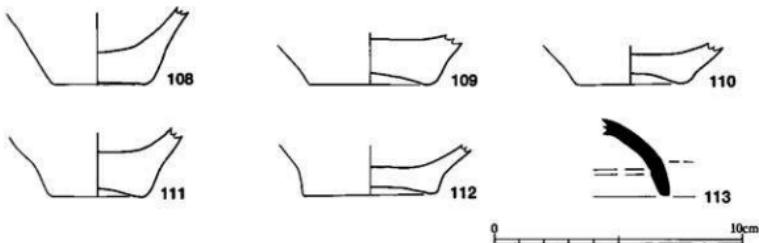
第10図 出土遺物実測図（3）（1：2）



第11圖 出土遺物實測圖（4）（1：2）



第12図 出土遺物実測図 (5) (1 : 2)



第13図 出土遺物実測図 (6) (1 : 2)

磨消繩文を施すものの中には、胴部上半（肩部）に入組文をもつものがある。文様の構成からは、入組文による文様帶の上下逆転部が元に戻るまでを文様の一つの構成単位としているようである。胴部の文様の残りが良い29をみてみると、口縁部直下には幅の狭い繩文が施されており、頸部の無文帯から胴部に至る。胴部の文様は基本的には横方向の沈線3条で構成されており、また、頸部と胴部の境に横方向に沈線1が施される。その下方に横方向に沈線2および沈線3が順に施される。沈線2の両端は横方向に引かれた沈線3を切断するように縱方向に短く折れて、そこからさらに横方向に折り返して終端にいたる。また、この沈線2の終端部には若干の間隔を置いて終端部の両側を繋ぐように沈線2'が施される。一方、沈線3は沈線2とは逆に胴部中央の屈曲部より僅かに上方で横方向に施されており、沈線2を切断するように縱方向に短く折れて、そこからさらに短く折り返して終端部に至る。また、終端部の両側を繋ぐように横方向に沈線3'が施されている。沈線2と沈線3で構成された幅広の入組文様は繩文が磨消され、沈線1と沈線2で区画された空間と沈線3と胴部中位の屈曲部により区画された空間が文様施文部となっている。すなわち、胴部中位の屈曲部までは上下反転文様が描かれる。もちろんこの基本原理は60・64・65にも共通してみられ、沈線が絡まって無文帯を構成する部分を中心とする点対称文様の反復展開をなしていると考えられる。

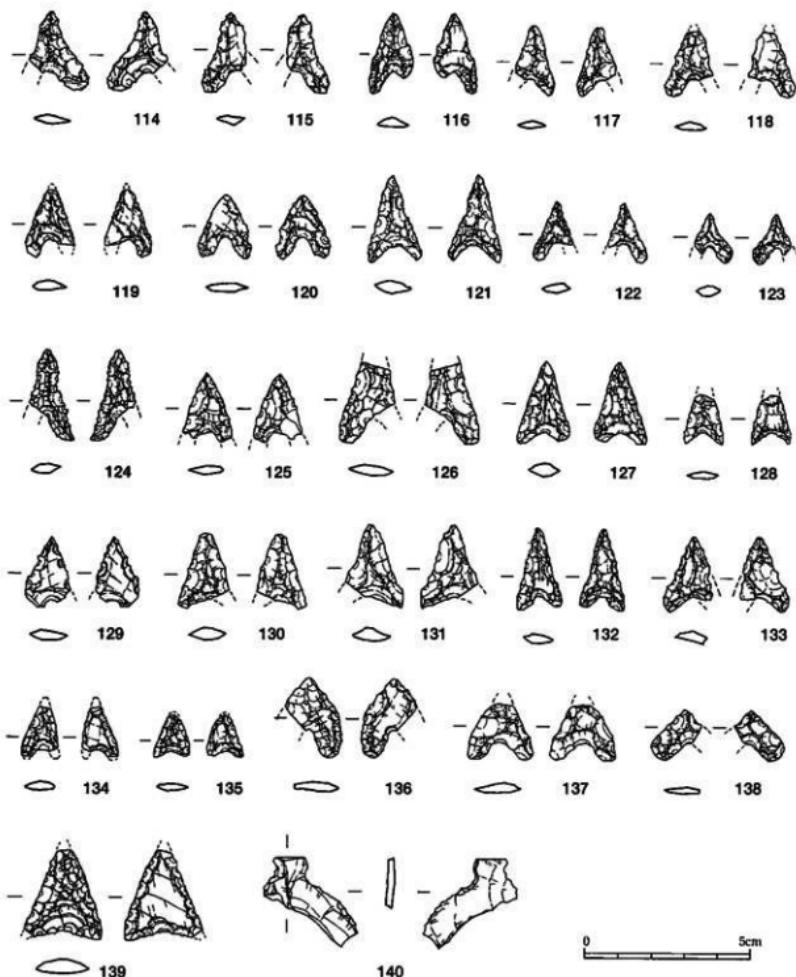
浅鉢形土器も胴部文様の構成は深鉢形土器にほぼ対応し、磨消繩文をもつもの(96~98)、繩文は施さず細い沈線だけで表現したもの(99・101・103・104)、文様帶区画内の繩文地に同方向の短沈線を加えたもの(100)などがある。

その他の土器 (第12図106・107・第13図108~112、図版10・11)

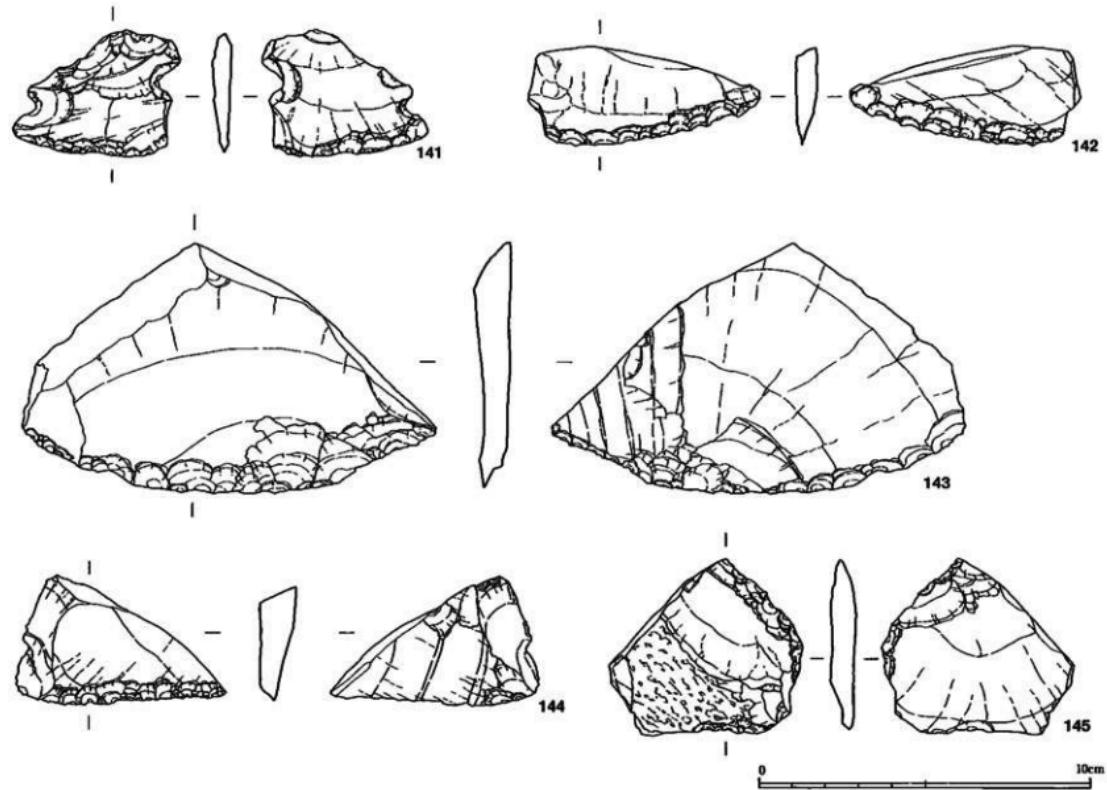
このほかに無文土器と底部がある。無文土器も有文土器と同じような器形になると思われる。この中には若干はあるが、胎土が緻密で、焼成が良好ないわゆる精製土器が存在する。底部(108~112)についてはいずれも若干上げ底気味の平底になるものが多い。このほかに図示できなかったが丸底が一点出土している。

(3) 石器

石器には石鎌、石匙、スクレイパー、二次加工のある剝片（R. F.）、剝片、碎片などがある。石材としては安山岩製がほとんどであるが、白濁した黒曜石の碎片数点が出土した。縄文土器に混在して出土しており、主要な出土地点も土器のそれとほぼ一致する。



第14図 出土遺物実測図(7) (2:3)



第15圖 出土遺物実測図（8）（2：3）

a 石鎌（第14図114～139、図版12）

主として基部形態と形状から4類型に分類した。すなわち、1類=基部が深く抉られて脚を形成するもの（114～126）、2類=基部の抉りが比較的浅いもの（127～135）、3類=長さに比べて幅が大きなもの（136～138）、4類=基部の抉りが深いもの（139）の4つの形態である。大きさや重量の点では、小型（122・123・128・134・135）、中型（114～121・124～127・129～133・136～138）、大型（139）に分かれる。形状的には二等辺三角形をなすものが多く、正三角形のものも一部存在する。また、大半は先端部あるいは脚部が欠損している。また、116は片脚鎌の可能性がある。

b 扱入石器（第14図140・第15図141、図版11・12）

石匙の可能性のある抉りをもつ石器で2点出土している。140は基部に両側から抉りを入れており、つまみ状を呈している。141は短辺の両側から抉りを入れるが、抉り自体は刃部に対して対称の位置ではなく、若干ずれている。端部には背腹両面から細かな加工を加え、刃部を形成している。

c スクレイバー（第15図142～144、図版11）

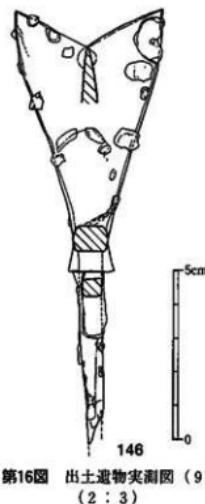
3点出土している。142は基部が消失しており、刃部の一部しか残存していない。剥片の先端を背腹両面から加工し、鋸歯状の刃部を形成している。143は素材剥片の打面側に背腹両面から二次加工を施し、刃部としている。144は刃部しか残存していない。剥片の先端部に腹面側からのみ二次加工を施している。

d 二次加工のある剥片（R. F.）（第15図145、図版11）

1点出土している。145は素材剥片の端部に若干の調整を腹面側から行っている。打面側には背腹両面から二次加工を施している。この打面側の加工痕は腹面の打撃痕を完全に除去している。

(4) 鉄器（第16図146、図版11）

鉄鎌1点が出土している。現存長13.0cm、幅4.4cm、厚さ0.5cm、重量48.91gで雁股状を呈している。茎の端部を消失するが、ほぼ完形である。茎の断面は正方形である。矢柄接合部との境に段が付く。茎から続く基部は断面長方形で雁股状に裾広がりになり、先端部は鋭く尖っている。



第16図 出土遺物実測図（9）
(2 : 3)

土器觀察表

遺物番号	部位	色調	調整(外面)	調整(内面)	遺存状況	出土地点	備考
1	胴部	黄褐色	刺突文	ナデ	普通	E - 1	
2	胴部	淡黄褐色	条痕文→刺突文	条痕文	やや不良	E - 1	二枚貝による条痕文
3	胴部	暗褐色	条痕文→刺突文→ナデ	ナデ	普通	北西端	
4	胴部	黄褐色	ミガキ→刺突文	条痕文	良好	E - 1	二枚貝による条痕文
5	胴部	淡褐色	条痕文	条痕文→ナデ	普通	北西端	二枚貝による条痕文
6	口縁部	淡黒褐色	押引文	ナデ	やや不良	C - 2	
7	胴部	淡褐色	押引文	ナデ	やや不良	南西	
8	口縁部	淡茶褐色	R L → 押引文	ナデ	普通	北東	半截竹管文、雲母多し
9	胴部	淡茶褐色	R L → 押引文	ナデ	普通	D - 3	半截竹管文、雲母多し
10	胴部	淡褐色	刺目凸帯	ナデ	普通	北西端	スス付着
11	胴部	淡黄褐色	条痕文→爪形文	ナデ、指頭圧痕	普通	西中央	12と同一個体、器壁凸凹
12	胴部	淡褐色	条痕文→爪形文	ナデ、指頭圧痕	普通	西中央	11と同一個体、器壁凸凹
13	口縁部	暗褐色	凹線文	条痕文	普通	E - 1	
14	口縁部	淡褐色	四輪文	ナデ	普通	E - 1	スス付着
15	口縁部	暗褐色	条痕文→円文	ナデ	普通	E - 1	
16	胴部	淡褐色	条紋→沈線	ナデ、条痕	良好	E - 1	
17	口縁部	暗褐色	沈線	ナデ	良好	E - 1	スス付着
18	胴部	淡褐色	条痕文→沈線	ナデ、条痕	良好	E - 1	16と同一個体
19	口縁部	黄褐色	沈線文	ナデ	不良	C - 2	
20	口縁部	淡黃褐色	条痕文	不明	やや不良	C - 2	口唇部に刻目
21	胴部	黄褐色	R L → 沈線→ナデ	不明	やや不良	C - 2	
22	胴部	淡褐色	R L → 沈線→磨消	ナデ	普通	C - 2	磨消純文
23	胴部	淡褐色	沈線文→R L	ナデ	普通	E - 1	磨消純文(充填)
24	口縁部	淡黄褐色	条痕文	条痕文→沈線	良好	E - 1	磨消純文
25	口縁部	黄褐色	条痕文、ナデ	R L → 沈線→磨消	普通	E - 1	口唇部にR L
26	口縁部	黄褐色	口縁帯 R L	口縁帯 R L + 沈線	普通	北東	
27	口縁部	黄褐色	条痕文	ナデ	良好	中央	口唇部に沈線
28	胴部	淡黄褐色	R L → 沈線→磨消	ナデ	普通	C - 2	磨消純文
29	口縁部	淡黄褐色	R L → 沈線→磨消、沈線	ナデ	良好	北東	磨消純文
30	口縁部	淡黄褐色	口縁帯 R L	ナデ	良好	C - 1	75と同一個体?
31	口縁部	黄褐色	口縁帯 R L	ミガキ	普通	東	波状口縁
32	口縁部	淡褐色	口縁帯 R L	ミガキ	普通	C - 3	穿孔有(焼成後)
33	口縁部	淡黑褐色	口縁帯 R L	ナデ	良好	北東	波状口縁
34	口縁部	淡黄褐色	口縁帯 R L	ミガキ	普通	北東	29と同一個体
35	口縁部	暗黄褐色	口縁帯 R L	ナデ	普通	北東	波状口縁
36	口縁部	淡黄褐色	口縁帯 R L	ナデ	普通	西中央	
37	口縁部	淡黄褐色	口縁帯 R L	ナデ	普通	北東	
38	口縁部	淡黄褐色	口縁帯 R L	ナデ	良好	中央	
39	口縁部	淡黄褐色	口縁帯 R L	ナデ	普通	北東	
40	口縁部	淡黄褐色	口縁帯 R L	ナデ	普通	北東	
41	口縁部	暗黄褐色	口縁帯 R L	ミガキ	やや不良	B - 3	31と同一個体?
42	口縁部	淡黄褐色	口縁帯 R L	ナデ	やや不良	北東	波状口縁
43	口縁部	淡褐色	口縁帯 R L	ナデ	普通	D - 4	
44	口縁部	淡黄褐色	口縁帯 R L	ナデ	普通	東	
45	口縁部	淡黄褐色	口縁帯 R L	ナデ	普通	東	
46	口縁部	黄褐色	口縁帯 R L	ミガキ	普通	C - 2	
47	口縁部	淡赤褐色	口縁帯 R L	ナデ	やや不良	C - 3	
48	口縁部	淡黄褐色	口縁帯 R L、ナデ	ミガキ	良好	南東	
49	口縁部	淡黄褐色	口縁帯 R L	ナデ	やや不良	C - 3	
50	口縁部	淡赤褐色	口縁帯 R L、ミガキ	ミガキ	普通	北東	
51	口縁部	淡黄褐色	口縁帯 R L	ナデ	普通	北東	

土器觀察表

遺物番号	部位	色調	調整(外面)	調整(内面)	遺存状況	出土地点	備考
52	口縁部	淡褐色	口縁帯 R L	ナデ	不良	C - 2	
53	口縁部	淡茶褐色	口縁帯 R L	口縁帯 R L + 沈線	普通	北東	
54	口縁部	淡黃褐色	口縁帯 R L	口縁帯 R L + 沈線	普通	東	
55	口縁部	淡黃褐色	口縁帯 R L	口縁帯 R L + 沈線	やや不良	中央	
56	口縁部	淡黃褐色	口縁帯 R L	口縁帯 R L + 沈線	普通	東	波状口縁
57	胸部	淡橙褐色	R L → 沈線文	ナデ	普通	E - 1	磨消繩文
58	胸部	淡黃褐色	R L → 沈線→磨消。沈線	ナデ	普通	D - 4	磨消繩文, 29と同一個体
59	胸部	淡橙褐色	磨消→沈線→R L	ナデ	やや不良	北東	磨消繩文(光項)
60	胸部	淡黃褐色	R L → 沈線→磨消。沈線	ミガキ	やや不良	表採	磨消繩文
61	胸部	淡黃褐色	R L → 沈線→磨消。沈線	ナデ	普通	北東	磨消繩文
62	胸部	淡橙褐色	R L → 沈線→磨消	ナデ	不良	北東	磨消繩文
63	胸部	淡橙褐色	R L → 沈線→磨消	ナデ	普通	東	磨消繩文
64	胸部	淡黃褐色	R L → 沈線→磨消→沈線	ナデ	普通	中央	磨消繩文
65	口縁部	淡橙褐色	沈線文	不明	やや不良	北東	
66	胸部	淡黃褐色	沈線文+列点文	ミガキ	普通	北東	66~68同一個体
67	胸部	淡黃褐色	沈線文+列点文	ミガキ	普通	C - 2	66~68同一個体
68	胸部	淡黃褐色	沈線文+列点文	ミガキ	良好	西中央	66~68同一個体
69	胸部	淡黃褐色	沈線文	ミガキ	良好	東	66~68同一個体
70	胸部	淡黃褐色	R L, ナデ	不明	普通	D - 4	
71	胸部	黃褐色	R L, ナデ	ナデ	普通	試掘	
72	胸部	黃褐色	R L	ミガキ	普通	C - 3	
73	胸部	黃褐色	R L, ナデ	ナデ	普通	東	
74	胸部	淡黃褐色	R L, ナデ	ナデ, ミガキ	普通	中央	
75	胸部	淡黃褐色	R L, ミガキ	不明	やや不良	C - 1	
76	胸部	淡黃褐色	沈線	ミガキ	普通	北中央	
77	胸部	淡黃褐色	R L	ナデ	普通	C - 2	
78	胸部	黃褐色	刻目凸帯	ナデ	普通	E - 1	
79	口縁部	淡褐色	条痕文	条痕文	良好	北東	二枚貝による条痕文
80	LII縁部	黃褐色	条紋文	条痕文	普通	西中央	口縁部に刻目
81	口縁部	淡黃褐色	不明	不明	不良	西中央	波状口縁
82	口縁部	黃褐色	L R 横文	ミガキ	良好	C - 3	波状口縁
83	口縁部	淡褐色	沈線文	ナデ	普通	E - 1	84と同一個体
84	口縁部	黃褐色	沈線文	ナデ	普通	E - 1	83と同一個体
85	口縁部	淡褐色	ミガキ→沈線→R L	ミガキ	普通	西中央	磨消繩文(充填)
86	口縁部	淡橙褐色	R L → 沈線文	ナデ	良好	E - 1	磨消繩文, スス付着
87	口縁部	淡黃褐色	R L → 沈線→磨消	ナデ	普通	B - 4	磨消繩文
88	口縁部	淡橙褐色	R L → 沈線→磨消	ナデ	普通	北東端	磨消繩文
89	LII縁部	淡黃褐色	R L → 沈線→磨消	ナデ	やや不良	中央	磨消繩文
90	口縁部	淡橙褐色	R L → 沈線→磨消	ナデ	普通	表採	磨消繩文
91	口縁部	淡黃褐色	R L → 沈線→磨消	ナデ	やや不良	C - 3	磨消繩文
92	口縁部	淡黃褐色	R L → 沈線→磨消	ナデ	普通	北東	磨消繩文
93	口縁部	明黄褐色	R L → 沈線→磨消	ナデ	やや不良	C - 3	
94	口縁部	淡黃褐色	L R → 沈線→磨消	ナデ	普通	C - 2	磨消繩文
95	口縁部	淡橙褐色	R L → 沈線→磨消	ナデ	普通	西中央	磨消繩文
96	口縁部	淡褐色	沈線文	ナデ	普通	表採	
97	口縁部	淡黃褐色	R L → 沈線→磨消。沈線	ナデ	やや不良	C - 1	磨消繩文
98	胸部	茶褐色	R L → 沈線→磨消	ミガキ	普通	中央	磨消繩文、繪彩
99	口縁部	淡黃褐色	沈線文	条痕文→ナデ	普通	北東	微かにR L が残る
100	口縁部	淡黃褐色	R L → 沈線	ナデ	やや不良	北東	
101	口縁部	淡黃褐色	ナデ+沈線	ナデ	普通	C - 2	
102	口縁部	淡黃褐色	幅広口縁帯 R L	ミガキ	やや不良	C - 1	波状口縁

土器観察表

遺物番号	部位	色調	調整(外面)	調整(内面)	遺存状況	出土地点	備考
103	口縁部	淡黄灰色	沈線文	ミガキ	良好	北東	
104	口縁部	灰褐色	沈線文	ナデ	普通	北東	103と同一個体か?
105	口縁部	淡黄褐色	口縁帯RL	ミガキ	良好	C-2	
106	口縁部	淡黄褐色	条痕文	ナデ	良好	C-2	
107	肩部	淡黄褐色	条痕文	条痕文	普通	西中央	
108	底部	淡黄褐色	ナデ	ナデ	普通	西中央	ほぼ平底
109	底部	淡黄褐色	ナデ	不明	普通	北東	
110	底部	淡橙褐色	ナデ	不明	不良	中央	上げ底
111	底部	黄褐色	ナデ	不明	不良	B-3	上げ底気味
112	底部	淡橙褐色	ナデ	ナデ	普通	北東	若干上げ底気味
113	口縁部	淡灰色	回転ナデ	回転ナデ	普通	南東	須恵器杯蓋

石器計測表

遺物番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材	出土地点	備考
114	石鎌	(24)	(17)	3	(0.62)	安山岩	C-1	
115	石鎌	23	(13)	3	(0.54)	安山岩	中央部	
116	石鎌	24	14	3	0.58	安山岩	北東部	片肩鎌の可能性
117	石鎌	21	(12)	2	(0.40)	安山岩	中央部	
118	石鎌	(20)	(15)	2.5	(0.49)	安山岩	南東部	
119	石鎌	(20)	(15)	3	(0.54)	安山岩	北東部	
120	石鎌	19	16	2.5	0.57	安山岩	C-3	
121	石鎌	26	16	4	0.99	安山岩	E-1	
122	石鎌	18	(12)	3	(0.25)	安山岩	東	
123	石鎌	20	(12)	3	(0.25)	安山岩	北東部	
124	石鎌	27	(14)	3	(0.57)	安山岩	C-1	鋸歯状
125	石鎌	(20)	(15)	2.5	(0.50)	安山岩	C-2	
126	石鎌	(24)	(17)	3.5	(0.88)	安山岩	東	
127	石鎌	25	(17)	4	(1.08)	安山岩	C-2	
128	石鎌	(15)	12	2	(0.32)	安山岩	E-1	
129	石鎌	(21)	(13)	3	(0.58)	安山岩	C-3	
130	石鎌	22	(15)	4	(0.80)	安山岩	C-3	
131	石鎌	25	(17)	5	(1.18)	安山岩	西側中央	
132	石鎌	24	13	3	0.59	安山岩	北東部	
133	石鎌	23	(15)	3	(0.66)	安山岩	中央部	
134	石鎌	(15)	(11)	2.5	(0.38)	安山岩	北東部	
135	石鎌	(12)	11	2	(0.25)	安山岩	C-1	
136	石鎌	23	(17)	3	(0.79)	安山岩	E-1	
137	石鎌	(20)	16	3	(0.88)	安山岩	西側中央	
138	石鎌	15	(15)	2	(0.39)	安山岩	C-3	
139	石鎌	(27)	(24)	4	(2.02)	安山岩	中央部	
140	抉入石器	(15)	(29)	2	(1.25)	安山岩	C-2	
141	抉入石器	(39)	(50)	6	(11.11)	安山岩	E-1	
142	スクレイバー	(30)	(70)	6	(17.10)	安山岩	北東部	
143	スクレイバー	(39)	(63)	11	(102.23)	安山岩	E-1	
144	スクレイバー	(75)	(126)	11	(29.00)	安山岩	北西端	
145	R.F.	(53)	(58)	8	(23.76)	安山岩	E-1	

*注 () は現存値、単位はmm、重量はg

V まとめ

和田平遺跡では明確な遺構は確認できなかったが、縄文時代後期を主体とする遺物（土器・石器）がまとまって出土した。これらの遺物は層位的にはほぼ黄褐色粘質土層の上面から出土しているが、出土状況には粗密がある。しかし、黄褐色粘質土中に縄文時代の生活面が存在することは確實である。ただ、縄文土器破断面の摩滅状態から、ある程度の遺物の移動を考慮しなければならない。ここでは、以上の点を踏まえて、本遺跡の立地と性格及び出土土器について若干の整理を行い、まとめとしたい。

立地について

本遺跡は東側を黒瀬川支流の松板川に注ぐ小川が流れる南北方向に緩く傾斜する平坦地（標高230m）に立地する。遺跡の東側は谷地形になっており、現在の小川の旧河道であった可能性もある。また、遺跡の基盤層は大きな礫が重層的に堆積しており、礫間の堆積土から遺物が出土している。礫層の形成時期は不明であるが、縄文時代に相当すると考えられる黄褐色粘質土は概ね調査区内の全域に広がっており、礫が露出している場所も多い。したがって、植生等は別として、景観自体はほぼ現在と同じであったと考えられる。

ところで本遺跡西方の広島大学周辺では縄文時代の遺跡が比較的多く確認されている。時期的には早期の遺跡が中心で、急峻な山塊が前面に展開する台地上の傾斜面あるいは緩やかに傾斜する平坦面に遺跡が立地することが多いようである。このような縄文時代の遺跡の立地状況は本遺跡でも同様で、当地域の縄文時代の遺跡立地を考える上で示唆的である。

縄文土器について

本遺跡から出土した縄文土器について、その施文方法や製作法から9類型に分類した。土器のいくつかについては従来の瀬戸内沿岸部の編年で定着している土器形式に当てはめることが可能である。また、類型内の文様や施文方法については偏りがみられ、これが時期差であるのか或いは地域差であるのか特定できないものもある。

まず、1類は2条単位の列点文や二枚貝を使用した条痕調整を施しており概ね羽島下層式に相当しよう。また、3類は薄い器壁に押引文を施しており、この特徴は彦崎21式に該当する。5類は地方色が強いとはいえる条痕地にやや幅広の爪形文を押引状に施文しており全体的には船元式の範疇で捉えて差し支えないであろう。以上の縄文時代前期・中期にあたる土器群は1から数個体分と僅少で、遺物の主体をなすものではない。

縄文後期の土器は4類型に分類したが、器種としては深鉢形土器と浅鉢形土器があり、文様の構成では有文土器と調整痕のみのいわゆる無文土器に分離できる。有文土器に比べると無文土器が量的には多く、両者はセット関係にあると考えられるが、具体的な組み合せについては特定できなかった。時間の変遷による文様変化がよく残る有文土器についてみると、概ね後期前半から中葉の土器群が主体をなし、後半期以降の土器は見当たらないようである。

まず、6類・7類の一部は基本的には中津式に該当しよう。ただし、地方色がみられるようで、

磨消繩文よりも文様パターンの線的表現に重点を移したような土器が散見できる。また、凹線気味の表現方法は九州系土器の影響を受けたとも解釈でき、後期の初頭における中津式土器を取り巻く複雑な状況を垣間見ることが出来よう。

中津式に後続する福田KⅡ式（7類の一部）から津雲A式・彦崎KⅠ式（8類の一部）に並行する時期の資料は僅少である。

文様帶が口縁部と胴部に分離する時期の土器 = 9類（彦崎KⅡ式並行期）が本遺跡では量的に最も多いと思われ、いわゆる内文をもつグループもこの一群に含めている。深鉢形土器では口縁部外面を僅かに肥厚させ、その肥厚部（幅1cm程度）に繩文を施すのが特徴的で、口縁部の形状は平口縁のほかに波状口縁を呈することも多い。頸部は基本的に無文帶をなし、胴部上半（肩部）は主文様帶を横走する沈線で幅広に区画し、区画内部に繩文を施し、その後曲線を主体とする入組み文様を描き、区画内の繩文を磨り消すか区画内の繩文地に更に短沈線を刻む等の多様な文様を作り出す。また、浅鉢においても口縁に沿って横走する沈線で狭い文様帶を作り出し、この中央に半円形のループ状の沈線を横に走らせ、この沈線から斜め方向に短沈線を刻み、結節繩文を模したものもある。この半円形のループ状の沈線文は非常に特徴的で、このような文様構成は在地色を強く反映したものと思われ、同時期と想定できる瀬戸内海沿岸部の土器群とはいささか趣を異にしているようである。

また、加飾性の強い胴部文様をもつグループとは対照的に単に繩文だけを施文したものも存在する。これらの土器がセット関係にあるのか或いは時期的な差を示すものなのかは重要なことであるが、遺物の出土状況からは違いを抽出できなかったことや周辺地域の状況に不詳の部分が多いことなどから不明といわざるを得ない。ここではほぼ同じような器形をもつ土器に文様構成上で細分の可能性があるという指摘に止めておく。

性格について

繩文時代の遺跡では、遺構が希薄で遺物のみが出土する場合が多くあって、そのような遺跡の性格については様々な解釈がなされている。同一の生活空間をもつと想定できる領域において、同時期と思われる遺跡間に、遺構の存在する遺跡と遺構の存在が不明確あるいは存在しない遺跡が混在する場合、一般的には遺跡の性格の相違を想起できる。

そこで、遺跡の性格を強く示すと思われる石器群の構成についてみてみる。ただし、石器の時期については不明な部分が多いのでここでは一括して取り扱うこととする。石器は石鏃とスクレイパーおよび剝片類で構成されており、石鏃とスクレイパーはいずれも、狩獵行為と強く結びついていると思われる。遺跡の基盤層の状態や利器的性格の強い石器の組み合せなどから、動物性食料の獲得に関する場所であったことが推定できる。具体的には、獣場・見張り場・キャンプ地・獲物解体場などが想定できるが、絶対的な資料数が不足しており現時点では特定できない。将来的な検討課題としておきたい。

a 遠景（調査前、東から）



b 近景（調査前、東から）



c 全景（調査後、東から）





a SK 1 検出状況（北から）



b SK 1 土層断面
(北西から)



c SK 1 完掘（北から）

a SK 2 検出状況（南から）



b SK 2 土層断面（東から）



c 調査風景（東から）



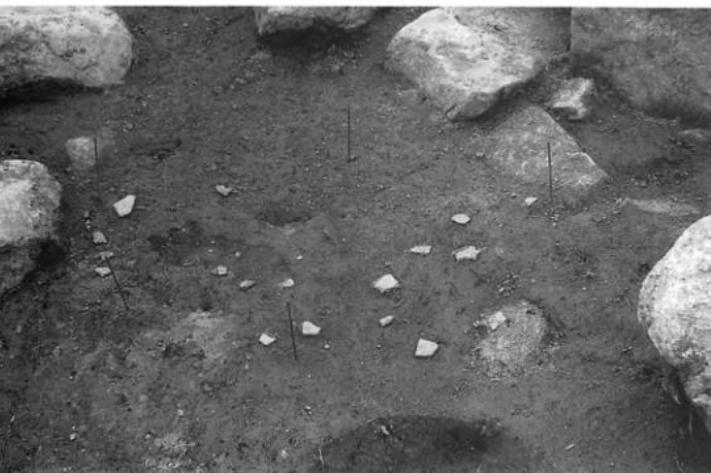
a C-2 区遺物出土状況
(西から)



b C-2 区遺物出土状況
(北から)



c C-3 区遺物出土状況
(北から)



a C-3 区遺物出土状況
(北西から)

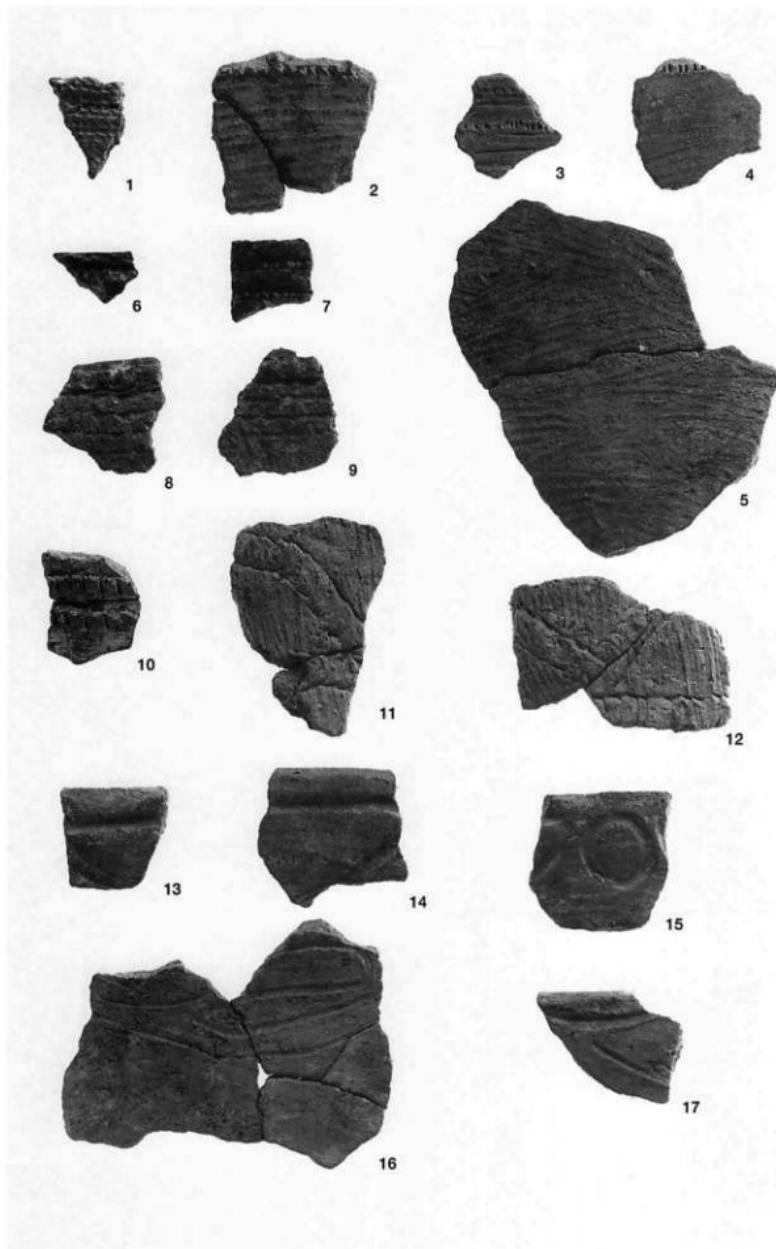


b E-1 区遺物出土状況
(南から)

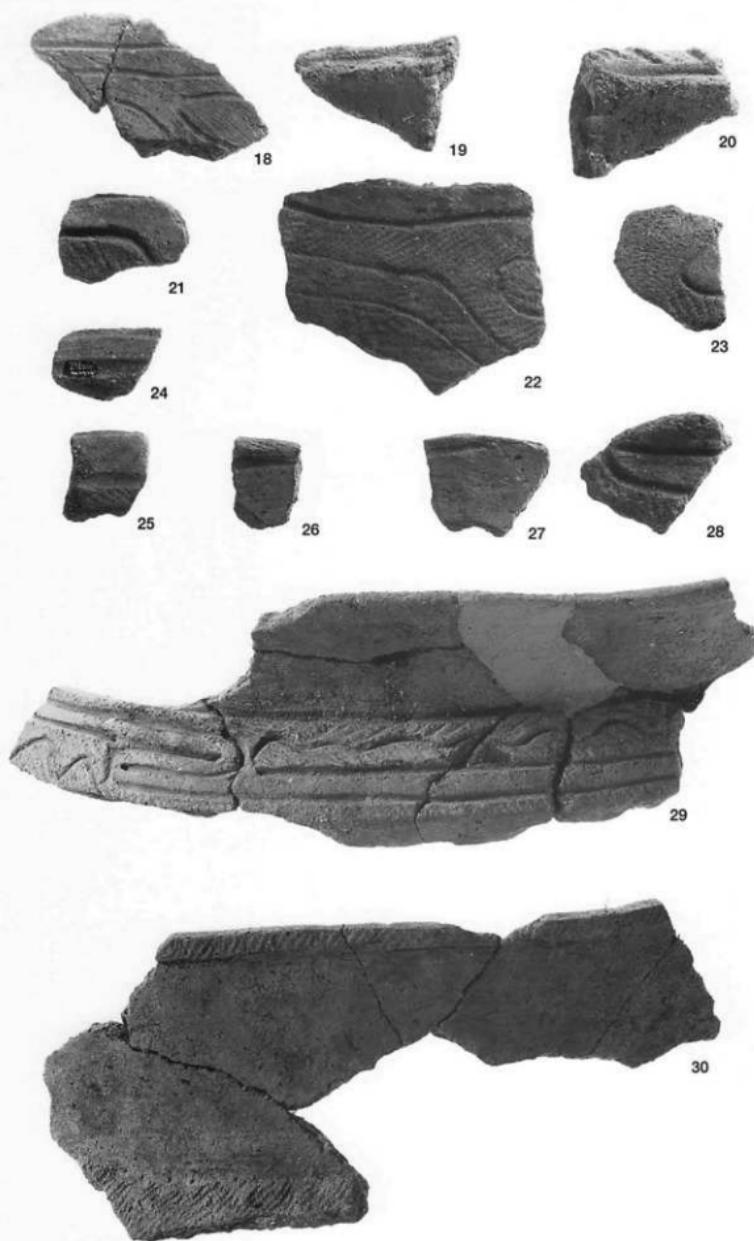


c 鉄鎌出土状況 (南から)

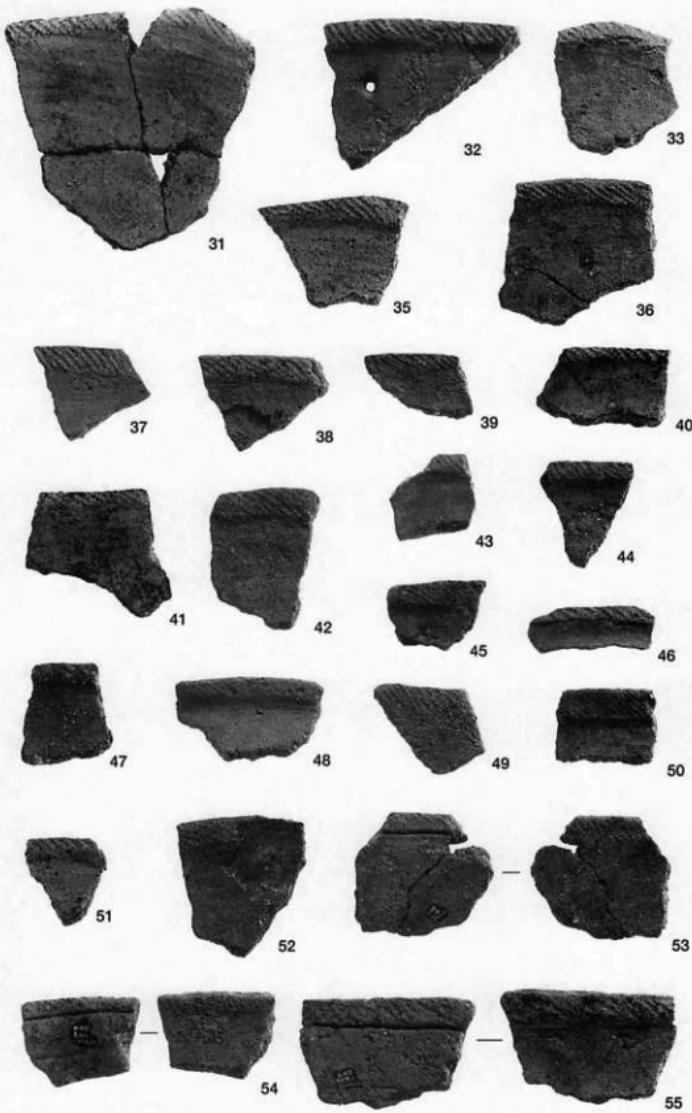




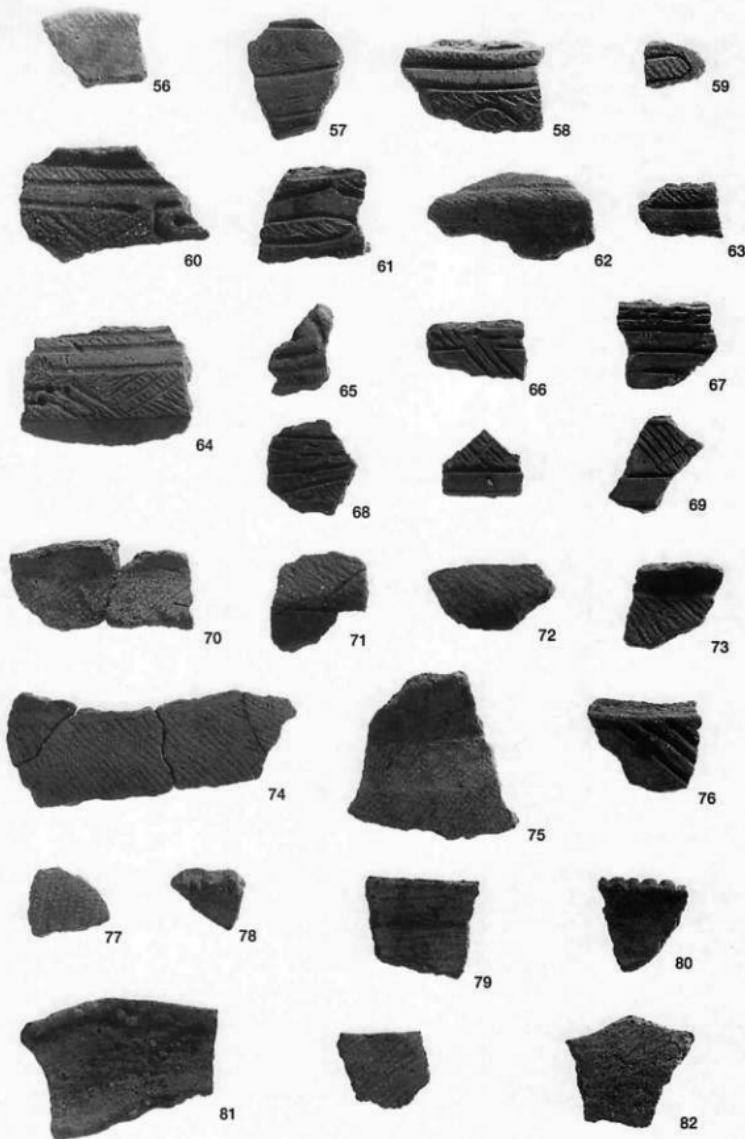
出土遺物1 土器



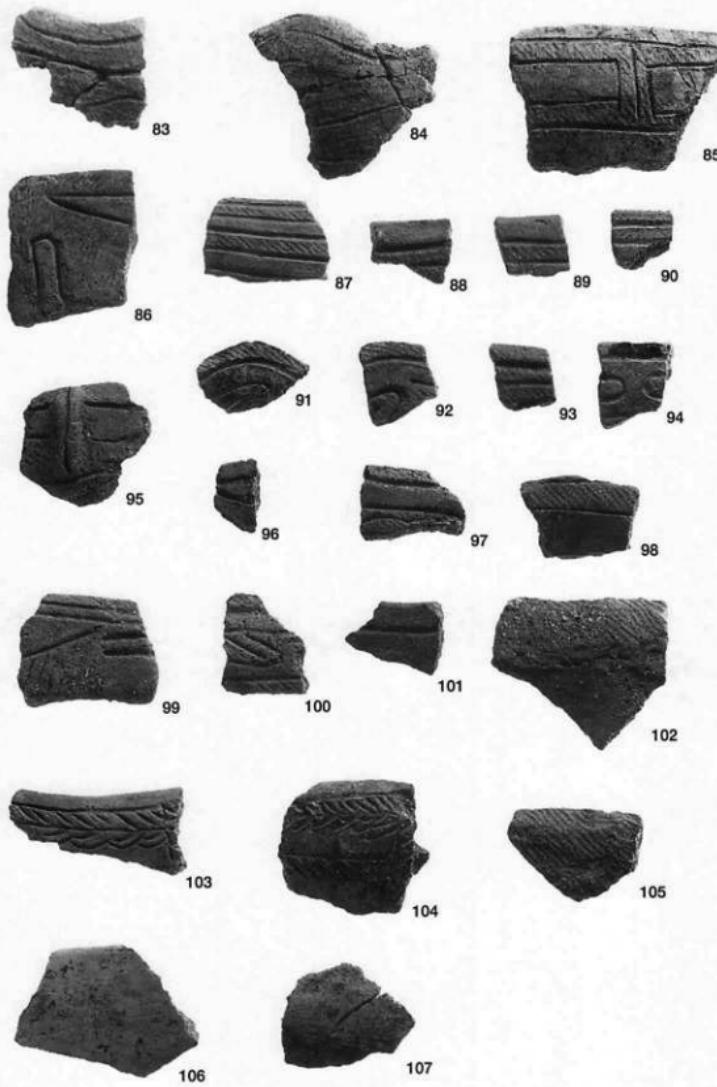
出土遺物 2 土器



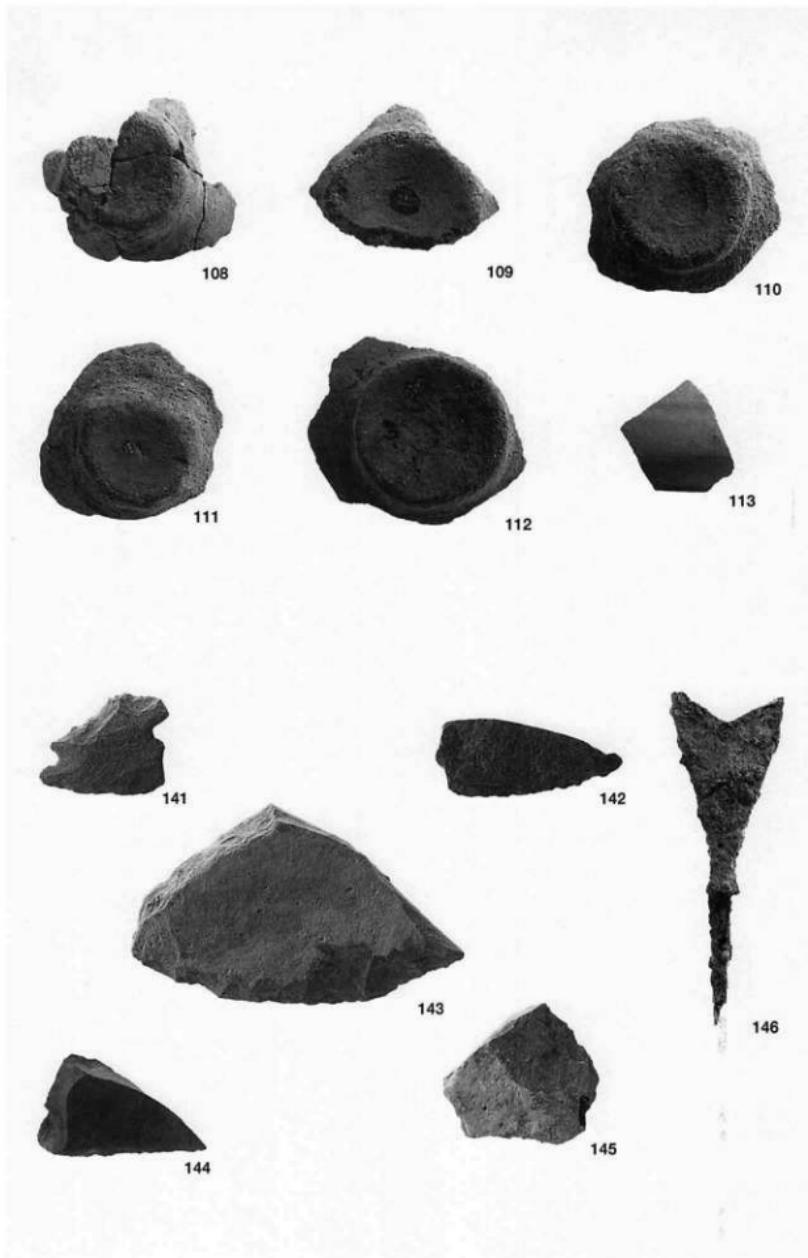
出土遺物 3 土器



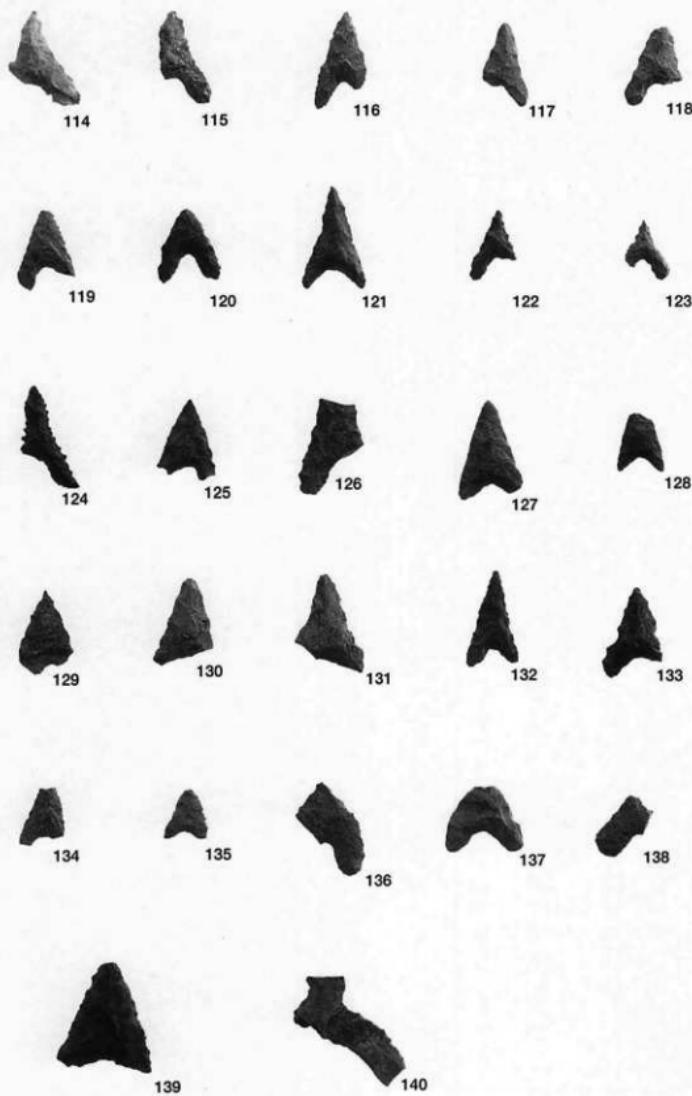
出土遺物 4 土器



出土遺物 5 土器



出土遺物 6 土器・石器・鐵器



出土遺物 7 石器

報 告 書 抄 錄

ふりがな	わだびらいせきはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	和田平遺跡発掘調査報告書							
副書名	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書							
卷次	第190集							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	辻 満久・出野上 靖							
編集機関	財団法人広島県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区観音新町四丁目8-49							
発行年月日	西暦2001年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	市町村	遺跡番号						
和田平遺跡	広島県 東広島市 西条町 大字福本	34212	884	34度 22分 18秒	132度 44分 56秒	20000410 20000609	1,650m ²	東広島県自動車道建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
和田平遺跡	生活跡	縄文	炉跡	縄文土器 石器		縄文時代後期を中心に、 前・中期の遺物も出土		

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第190集
和田平遺跡発掘調査報告書

発行日 2001（平成13）年3月31日

編集・発行 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター

〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号

TEL (082)295-5751

印刷所 中本総合印刷株式会社